

#### 4-2 F. Yさんのケース

##### (1) F. Yさんプロフィール

1972年、香川県生まれ。療育手帳㊦。幼い頃から小さな発作があったが、最近は何年に数回程度あるのみになった。

養護学校高等部卒業後、1992年4月より、現身体障害者通所授産施設である「善通寺希望の家」の前身、小規模作業所「善通寺希望の家」に通所。1998年4月に法人化され、通所授産施設になった後も相互利用の枠で通所することとなり現在に至っている。

明るく、元気で、人なつっこい性格である。人への関心が高く積極的に関わり、挨拶や「なにしょん？」という話かけをよくしている。施設においては、クリーニングなどの対人関係の仕事を好んでしている。また、最近ではさりげない気配り、いたわりの声掛け等もされるようになってきている。施設内では、ムードメーカー的な存在になっており、人気者の一人である。

幼い頃から施設などに入所した経験はなく、自宅で家族とともに暮らし、作業所へ通うという日々を過ごしていたが、2000年10月よりグループホームを利用している。毎週金曜日の夜から月曜日の朝にかけては同市内にある自宅に帰省していたが、最近では、週末にも帰らない時がある。家族は父・母・祖母・姉の4人である。

食べ物で特に嫌いなものはないが、麺類が大好きであり、食べ過ぎにならないようにしなければならないと周りには心配している。お正月にゲームボーイを購入して、よく遊んでいる。作業中も離さないことが多々あり、仕事に集中できないという問題点も出てきている。今は、朝に通所した後に、鞆を片付ける仕事を依頼され、積極的に取り組んでいる。

F. Yさんは、おしゃれが好きであり、鞆もたくさん持っている。支援費制度の移動介護を利用して、外出をするのが楽しみの一つとなっている。

##### (2) F. Yさんの1週間

2003年11月7日(金)

グループホームでの朝

7時15分

F. Yさんは便秘気味のせいかわ、朝起きてもしかめっ面で言葉も少なく、ずっと黙っていた。「ご飯は無理せんでいいよ。」と言うと、首を横に振り少しずつ自分のペースで食べていた。ゆっくりではあったが残さずに食べた。

食後、ゆっくり時間をかけてトイレに座ってみることを進めたが、トイレに座る様子は見られなかった。自力排便するため、いつ排便があったか確認はしていないが、今後、排便状況についても確認していく必要があるのではないかと感じた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

授産施設の利用

9時30分

机の上に粘土をちぎって丸めたものをたくさん作っていたので、スタッフが少し大きめの器を作り、「この器にYさんが作ったものを飾りつけていこう！」と提案し、了承を得たので一緒に作品づくりをした。どの丸い粘土をどの場所へつけるのかよく考えながらつけていった。最後の丸い粘土をつけ終わると、「やったあ〜！！」と両手を上に上げて

喜びを表現していた。根気よく、粘土をちぎったり、丸めたりしていた。

13時30分

ソフトタッチのボールを転がし、的にボールが転がると各得点になるゲーム（ダートゲーム）を行った。自分の番になると、とても嬉しそうにハッスルしてボールを転がす姿があった。（少し興奮気味なところもあり）他メンバーがゲームをしているときには、横で「頑張れ〇〇さん」と言って雰囲気作りをしていた。

このゲームに夢中だったためか、途中来られたお客さんへのあいさつは十分できなかった。

※社会資源：身体障害者通所授産施設（普通寺希望の家）

グループホームでの生活

18時00分

グループホームに夕食を食べに来たスタッフは「はいはい」と言い、自ら味噌汁を温めていた。夕食準備時には唐揚げを揚げてくれたが、油を温めているとき、パン粉を少しつかみ「これでええ？」と温度を確かめる姿も見られ、びっくりしてしまった。朝食の下ごしらえ時には、ポテトサラダのじゃがいもを潰したり、木じゃくしを持ったり、楽しそうに作っていた。自分が何か作るときには、他の入居メンバーに「〇〇さん見て！」といつもアピールしているが、今日そばで〇〇さんが少しうとうとしていると「寝よるんか」と何度も言い、突然、〇〇さんに怒鳴ってしまうことがあった。本人はしばらく無言になり反省したようで、寝る前に〇〇さんのそばに行き、「ごめん」とあやまり、「おやすみなさい」と言って居室に帰っていった。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

2003年11月8日（土）

グループホームでの朝

8時25分

作業（仕事）も今日は休みということで、いつもよりゆっくりと起きてくる。トイレを済ませ、「おはよう」とリビングに来て、他のメンバーさんに挨拶をする。

9時00分

昨夜、一緒に下ごしらえしたパンとサラダを、「これ、私作った分で！」と他のメンバーさんに嬉しそうに話す。パンをレンジにかけた時、「まだかなあ！？」とレンジを覗きこんでいる。食べる時には「美味しい！？」と皆に聞き、他のメンバーさんが「Ｙさんありがとう」と言うと「いえいえ」と嬉しそうに手をたたいていた。

食事後は「ごちそう様でした」と手を合わせ、食器を流し台までさげてくれた。

9時30分

自分の部屋からフェイスタオルを持ってきて、顔を洗う。トイレを済ませ、自分の部屋に帰り、気に入った服に着替える。

朝食後の片付けを手伝ってくれた後、テレビを観て過ごす。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

## 朝の散歩

10時30分

「おはようございます」と玄関の戸が開くと「はあい」と廊下を走り、急いで出て行く。ふじケアさんとの契約で、11:30迄一緒に歩いてくることを伝えると「はあい、行ってきまあす」とさっさと靴をはき、出て行った。

11時30分

「ただいまあ」と汗だくで帰ってきた。「楽しかった?」と聞くと「うん」と大きくうなずき、サポートの方に「ありがとうございました」と大きな声で挨拶する。その後、風邪をひいたらいけないので、すぐに服を着替える。

※社会資源：知的障害者居宅介護サービス ふじケアセンター（1時間）

## 買い物

11時40分

昼食と夕食の買い物に行く。野菜など、先に必要なものをかごに取って入れてもらう。その後、自分の欲しいものを1つだけ買った。今日はビスケットを買った。時間はかかるが、自分で財布から支払いをしている。昼食はお弁当にした。好きな弁当を選び「カツカレー下さい」と言い、自分で支払いを済ませ「ありがとう」と店員さんに挨拶をする。

12時20分

帰宅後、コップにお茶を入れ、「いただきます」と言って、美味しそうに食べる。食事中は食べるのに夢中で、ペースが早かった。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

## 映画鑑賞

13時00分

生活支援の山根さん（授産施設職員）の運転する車（希望の家のハイエース）で付添いにて、四国学院へ映画を見に行く。映画費1000円を自分の財布から支払い、「朋の時間」映画が13:30～16:30迄上映される。その後、本を大切に持って帰ってきた。仲のよいメンバーの山下さんも一緒だったので、「楽しかったなあ」とリビングで肩をくんでいた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）、授産施設職員

2003年11月9日（日）

## グループホームでの朝

9時30分

朝から天気は雨で、カーテンを閉めていると暗く、また少し冷え込んだのもあって、F、Yさんはなかなか起きられなかった様子。昨日他のメンバーさんが2人帰省し、グループホーム内は何か静けさがあった。いつもの様にトイレを済ませ、寝むたそうにリビングに腰かけている。

10時00分

F、Yさんは食事中も少し寝むたそうに、ゆっくりしたペースで食べる。朝食後、世話人に「何か飲む?」と聞いてくれ、世話人は「今はいいよ、ありがとう」と言い、自分でコーヒーを入れて飲む。丁度冷蔵庫の牛乳がなくなり、F、Yさんは「おねがいします」

と言う。

自分の部屋からフェイスタオルを持ってきて、顔を洗う。その後自分の部屋に帰り、気に入った服に着替える。

10時10分

外はよく雨を降っていて、特にこれといって予定もない。リビングで、「笑っていいとも増刊号」を見たり、新聞の広告を見て過ごす。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

買い物

12時50分

少し雨が小雨になったので、昼食を世話人と買いに行く。他のメンバーさんに対して、「お昼何食べたい？」と問いかけている。「行ってきます」と大きな声で言い、世話人の車の前で待っている。次で夕食の買い物もすることにし、すき焼きにすることを伝えると野菜コーナーには立ち寄らずお肉の前まで突っ走り「どれ？」と指示して言っている。結局、今日もお昼はお弁当にし、「のり弁当下さい」と自分で注文し、お金を支払った。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

昼食と夕飯の支度

14時00分

帰宅後、他のメンバーさんに「ただいまあ。帰ったよー。お弁当買ってきたよ」と言い、手渡す。そして自分もコップにお茶を入れ、「いただきます」と言って、美味しそうに食べる。食後は、お弁当のゴミの分別が分からず、「こっち？」それとも「こっち？」と指示してゴミ箱の前で立っていた。

14時10分

お腹もいっぱいになり、ソファーにもたれてTVを見ながらゆっくりする。カバンの中から、大好きなカードや、便せんを取り出し大切そうに見ている。

17時00分

今夜は、すき焼きにすることにした。下準備として、糸こんにゃくやうどんをゆがいてもらった。そして少し大きめの鍋に油をひいて、お肉から番に入れていってもらった。調味料の順番と量を横でサポートしながら上手く味付けすることが出来た。少し味見すると「これ、おいしい」と嬉しそうにして「OK!」とガッツポーズをしていた。また、ご飯も洗ってもらった。「少しずつ洗って、水を入れて流す時はこぼさない様にね」と言うのと「へいへい」と、とても料理の時間を楽しんでいた。ご飯のスイッチボタンを押すと、自分で自分に拍手をしていた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

2003年11月10日（月）

グループホームでの朝

7時20分

F. Yさんはいつもより遅い時間に起きてきた。その後は朝食・片付け・着替えなど動きはスムーズであった。

8時30分

朝食中、「あとで洗濯物干し手伝って…」と投げかけておいたところ、準備ができた後は、ハンガーにパジャマやトレーナーを1枚1枚つるしたり、タオルを干したり、手ぎわよく洗濯物干しを自分からおこなっていた。生活リズムが身につけており、次に自分が何をやらなければならないかよくわかっていることを改めて感じた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

音楽活動の時間

9時30分

楽しみの音楽活動であり、マイクを持ってみんなの前に立って『大きな古時計』を歌う様子も見られていた。体を揺らしてリズムをとったり歌謡曲では、突然両手をあげ、踊り出し体を使って自由に表現する姿もあった。汗をかきながら活動に参加するほどであり、音楽の時間が楽しい活動になっていることが伝わってきた。

13時30分

袋の枚数がぞえの仕事をした。1, 2, 3とゆっくりうたをうたうようにかぞえていると「おもしろ」と言いながら大笑いする様子が見られた。

他メンバーがジュースを飲みたいと言っているのを目にして、「私がするけん」と言って、自動販売機までメンバーを連れていき、財布からお金を出してコーヒーを買い、ストローをつけてコーヒーを飲ませてあげていた。できることでメンバーのサポートをしているが、お金の扱いは十分気をつけておかねばならない。

※身体障害者通所授産施設（善通寺希望の家）

体験宿泊をするメンバーへのサポート

18時00分

グループホーム体験宿泊するメンバーに対して、食事を配ったりお茶を入れストローをさし込んであげたり自分のできることでメンバーへのサポートをしていた。「ありがとう」と言われると「いえいえ」と返答しながらとてもうれしそうな表情をしていた。

入浴時にも足を持ってくれたり、トイレの手伝いをしてくれたりスタッフの手伝いをする様子も見られた。風呂の中では一緒に歌をうたったり、数を数えるなどメンバーとのやりとりもできていた。また「～さん、今日泊まっているからお母さん淋しいなあ」と家族のことを考えた表現まで飛び出す程であった。自分の生活と重ねて考えていたのではないかと思った。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

2003年11月11日（火）

グループホームでの朝

7時10分

起床、いつも通り起きて、まず食堂に行き、朝食をとった。次に自分から部屋に戻り、着替えスムーズに出勤準備をしていた。「これでええかな」と自分の服の着こなしを確認する表現が出ていた。

出勤まで時間があつたため、部屋の掃除機かけをしてもらった。「こうやる」と言いながらカーペットの上を掃除機かけしていた。なるべく口でアドバイスするようにし、今後

の掃除機かけに生かせるように対応した。繰り返し掃除機かけをしながら、掃除の仕方もある覚え自分の部屋の掃除もできるようになるのではないかと感じた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

#### 袋数えの仕事

9時00分

袋の数を数え、36枚を1束にまとめる仕事に参加した。スタッフや他のメンバーと一緒に声をそろえて「1・2・3・4～9・10」と数え一生懸命仕事していた。数の概念を理解することは難しいが、1～10位までなら言えるため、数のかぞえ方も歌にしたり、声のトーンをかえたりしながらかかわった。単調な作業ながらも、仕事が完成していくのが目に見え「あとちょっとや」と言う言葉も出ていた。

15時30分

歯科通院に出かけた。通院にも慣れ、元気よくあいさつし、診察券を出し、待合室で待っていた。呼ばれると「ハイ」と大きな声で返事し、診察室に入っていった。Drに「今日つめるん」「(前治療したところ)痛くなかった」と聞いたり伝えたり、たくさん言葉が出ていた。自分からしゃべりながら治療することを自分に言い聞かせがんばろうとする姿勢を感じた。

17時00分

トイレの中から「パンツもってきてくれるん？」と叫んで、トイレが間に合わず、下着がぬれてしまったことを伝えてくれ、着替えをした。こんなにはっきりとした言葉で伝えてくれたのははじめてでうれしかった。あとから「うまく伝えられたね」と声をかけた。

※身体障害者通所授産施設（普通寺希望の家）

#### 夕食の準備

19時00分

「夕食の準備しよっかあ～」と声をかけると、自分からガスレンジのところへ行き、フライパンの柄を握り、火をつけた。油をひいて、下ごしらえしてくれていた炒め物の具の半量ずつ炒めよう！ということ伝えると「これでええかなあ～」と何度も確認してきてくれ、「お肉の赤い所がなくなるまでもう少し炒めて」等と言葉を返していった。6人分のお皿へのつぎわけも量に偏りはあったがすすんでやってくれていた。つぎわけた後に量の多い所、少ない所を伝え、調整をしてもらった。最近、料理に興味をもち、前向きな姿勢であるように思う。

沸かしておいたお茶を冷水ポットへ入れるのを仲良しの他の入居メンバーにお願いしたところ、自分が変わって全部やろうとした。頼んだ入居メンバーもやりたそうだったので役割分担してペアでお茶入れをしよう！と伝えるとそれはすんなり受け入れ、協力してできた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

2003年11月12日（水）

グループホームでの朝

7時55分

朝6時半にトイレには起きてきていたがその後再び居室に戻って眠る。いつもよりリビ

ングに来るのが遅いので居室へ行き、「もう起きてごはん食べて準備せんと遅刻するよ。今からおみそ汁もついで待ちよくけん来てよ。」等と伝えると言葉での返答はなかったが、  
8時05分

少ししてリビングへ朝食を食べに来た。言葉数は少なく、いつもより元気がない様子ではあったが食事は全量摂取。

後片付けの時、他のメンバーのコップ運びや洗い終わった食器を食器乾燥機へいれてくれるのをお願いするとすぐにやってくれた。食器を入れながらにこにこして何度もスタッフの臀部をふざけて叩いていた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

マフラー展見学

9時30分

他施設でおこなわれている「さをり織りのマフラー展」の見学に出かけた。玄関先に飾られていた「さをり織り」を見て「わあきれい」と見た第一印象を言葉で表現していた。

「こんなのまた作ろうね」と作品作りへの声かけをすると、親指でOKのサインを出しながら首を大きくうなづかせる様子もあった。外に出かけ他の作品を見ることによって本人なりに刺激を受けたようである。

※身体障害者通所授産施設（善通寺希望の家）

書道の時間

13時30分

かまぼこ板に墨を使って書こうと声かけし、かまぼこ板と筆を手渡した。すると、筆に墨をたっぷりつけて思うままに描いていた。力強さのあまり真っ黒になっていた。つぎはスタッフから絵の具と墨を混ぜたもの（オレンジ系）の色を作って渡すと、絵を描くように筆を走らせ、満足気であった。この作品が一番気に入ったようで、他のスタッフや迎えに来た父兄に見せてまわる様子も見られる程であった。作品名を聞くと「太陽」と答えており色に合うイメージで名前をつけたようであった。

15時00分

1日おでかけしてきたメンバーに「〇〇さん、ボウリング楽しかった？」「よかったな」といろいろやりとりする様子も見られた。さり気ないやりとりが仲間づくりにつながっていると感じる。

※身体障害者通所授産施設（善通寺希望の家）

体験宿泊者への案内

17時30分

緊急でグループホームに宿泊することになったメンバーの世話をしなければという思いが強く、食事は「ここここ」と言って指さして場所を伝えたり、車イスを押して部屋まで案内するなど積極的に動いていた。

20時00分

食器乾燥機にかけていた食器の後片付けを頼むと「ハイ」と言って食器棚に片付けてくれた。どこに何を片付けるかよくわかっており生活者であることを痛感した。自然と身についた力であると感じた。

※社会資源：居宅生活支援（グループホームけやき）

2003年11月13日(木)

グループホームでの朝

7時00分

起床。朝食中、なかなか食べようとしないう他のグループホームのメンバーに対して、「○○さん、食べよう、おいしいで」と声をかけ、一緒に食事をしようと投げかける様子が見られた。

8時15分

自分の部屋に戻り、着替えてきた。前日から朝着る服を世話人が出していたが、気に入らなかったのか自分で服を変えて着替えていた。服選びはその都度本人と一緒にすることも必要だが、本人に任せておき、自由にしてもらった後、色の組み合わせ等アドバイスする方法も今後考えていきたい。

10時30分

午前中の活動時の休憩中、男性メンバーにあたまをたたかれることがあった。落ち着いていないメンバー(Kさん)ではあるものの、本人も何かイヤなことを言われたことに対してたたきかえしてしまった。

気になる言動については、その都度タイミングよく何がよくないかきちんと説明しなければならない。

給食後、厨房スタッフに「おいしかったで」と食べた感想を伝えながらコミュニケーションしていた。

※社会資源：居宅生活支援(グループホームけやき)

バザーの準備

13時30分

バザーの準備をすることを伝えると、大きな声で「ハイ」と言い、品物の数をかぞえたり、値札をセロテープどめしたり、はりきって動いていた。きちんとしていること、役割をこなしていることを他スタッフに見てほめてもらいたく「見て見て、これしよるんで」と自分からアピールしてきていた。

15時40分

帰宅後トイレに行き、車イスを乗り換えるメンバーに対して、「私が車イスとってくる。まっというて。」「これでえんやろ」と言い、自分ができる手伝いはりきってやっていた。

※身体障害者通所授産施設(善通寺希望の家)

夕食

18時45分

夕食後、手を合わせて「ごちそうさまでした。おいしかったです。」と言い、食器を下げていた。昼の給食時にもおいしかったと伝えられており、こうしたやりとりの中から本人らしさが出たり、コミュニケーションが広がってきていると感じた。

20時40分

朝食の下ごしらえでホットドッグを作った。切りさいたパンにバターをぬったり、炒めたキャベツをはさんだりの手伝いをしてくれた。調理も好きであることがわかった。

※社会資源：居宅生活支援(グループホームけやき)



F. Yさんが1週間に利用する社会資源 (2003年11月7日～11月13日において)

	7(金)	8(土)	9(日)	10(月)	11(火)	12(水)	13(木)
0							
1							
2							
3							
4	グループホーム			グループホーム	グループホーム	グループホーム	グループホーム
5		グループホーム					
6							
7							
8							
9	送迎			送迎	送迎	送迎	送迎
10							
11		移動介護					
12	通所授産	グループホーム	グループホーム	通所授産	通所授産	通所授産	通所授産
13							
14		通所授産スタッフ ボランティア (無料)					
15							
16	送迎			送迎	送迎	送迎	送迎
17							
18							
19							
20	グループホーム	グループホーム		グループホーム	グループホーム	グループホーム	グループホーム
21							
22							
23							

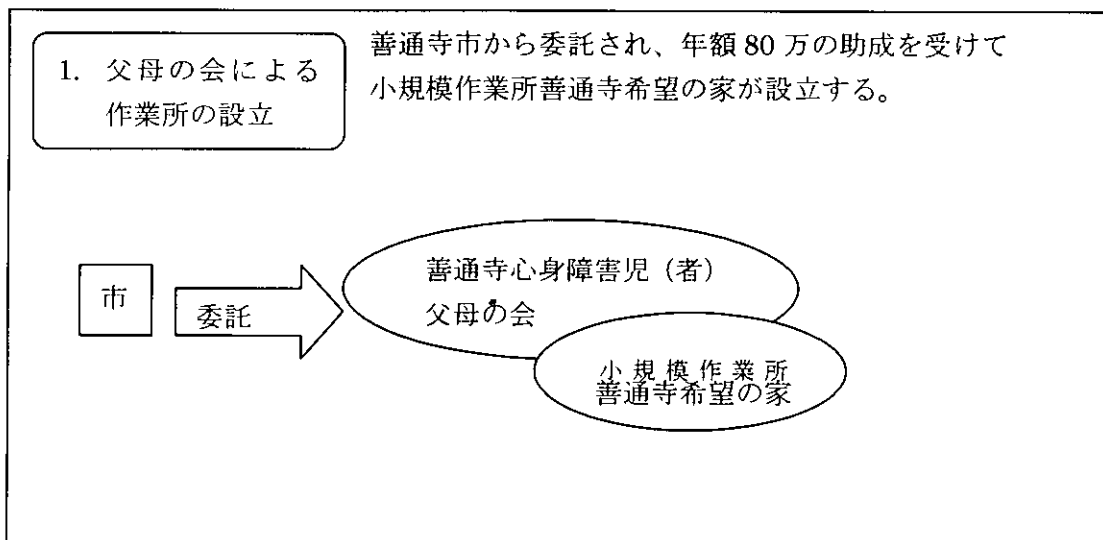
- ・通所授産に掛かる費用：166,400円(月額)
- ・移動介護に掛かる費用：1,530円(1時間未満)
- ・知的障害者地域生活援助支援費：132,650円(月額)

## 5. 香川県善通寺市における地域生活支援の歴史

香川県善通寺市における地域生活支援の展開の背景には、F. A（65才）さんを中心とした「親の会」が常に第一線に立ち、四国学院大学というマンパワー資源を効果的に活用しながら、地域における福祉活動を推進していく“地域力”を高めてきた歴史がある。

この地域の牽引的存在であったF. Aさんは、昭和40年に長男であるF. Bさんを出産したが、F. Bさんは生後まもなく重症黄疸のため脳性マヒとなり、身体障害及び知的障害を重複する障害者としての人生を歩むこととなった。学童期に入ると、F. Bさんは「香川養護学校（後の高松養護学校）」に在籍し、高等部を卒業するまでの12年間母親の手を借りて通学してきた。その頃から、F. AさんはF. Bさんの将来について漠然とした不安を抱いていたが、養護学校卒業を迎える時期になり、F. Aさん親子は卒業後の進路という具体的な課題に直面するようになった。その当時、F. Aさんの知り合いには、養護学校を卒業したものの就職先や地域での活動の場がなく、在宅で閉じこもりがちな生活を余儀なくされている障害者が数名おり、危機感に駆られたF. Aさんは「小規模共同作業所」を作ることを考え始めたのである。

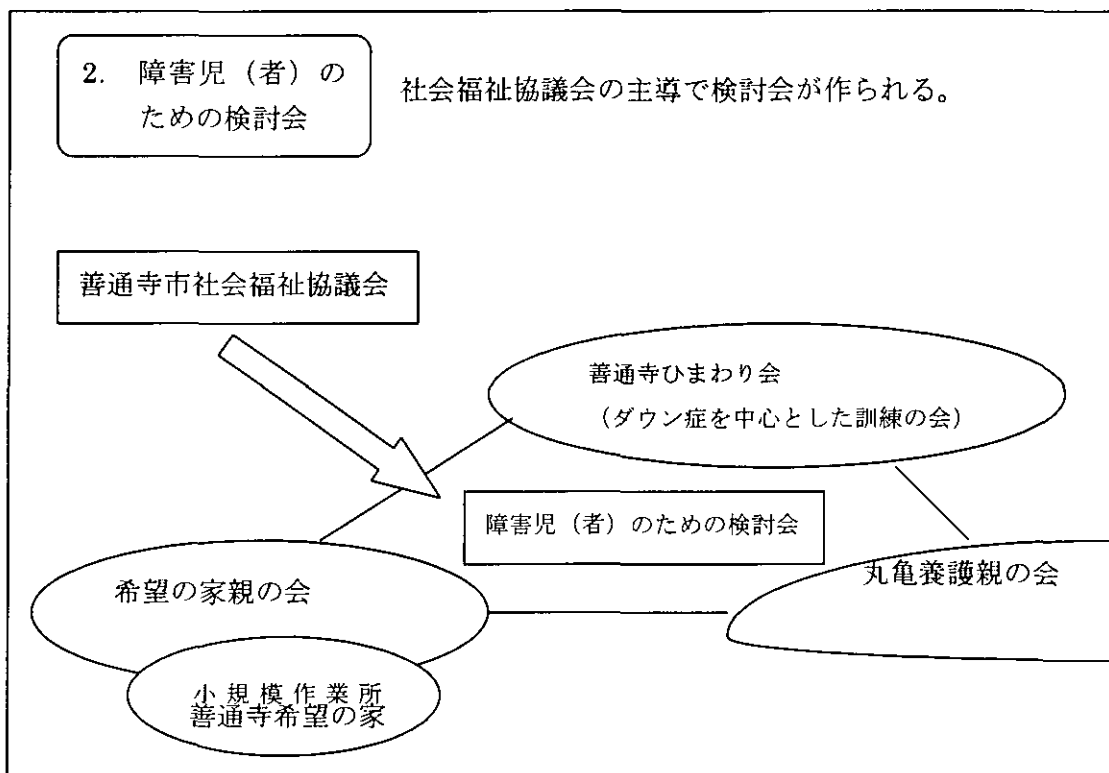
「善通寺市中心身障害児（者）父母の会」（以下、父母の会と略す）は、F. Bさんがまだ4歳であった昭和46年4月1日に発足した。その当時は、家庭においても身内に障害者がいることを隠す傾向があり、特に母親は「障害児を生んだ」という事で肩身の狭い思いを抱かされることが多々あったため、「親同士が励まし合い助け合いができれば良い」という思いを基本に父母の会が結成されたのだった。しかし、実際に活動が始まってみると、運営は会長にお任せとなり、会員が自主的に活動することも少なく、年に1～2度夏休みや年末に集う程度の活動しか行われなかった。当時は役員の交代もなく、その後はどうにか会が存続していたというのが実態であった。しかし、前述のように地域に小規模共同作業所を作りたいというF. Aさんの切実な願いと、その思いに賛同する会員の自主的な動きが活発化し、昭和58年10月14日、「父母の会」は無認可の小規模作業所「善通寺希望の家」を設立するに到った。設置主体は善通寺市であり、市から年額80万円の助成を受け運営は「父母の会」へ委託されたが、財政的な事情から当初は市内繁華街にあるスーパーマーケットの裏にある市有地を借りて、活動がスタートすることになった。開設時の利用



者は5名であったが、作業所を拠点として「父母の会」の活動がさらに活発化するにつれて、障害児を抱えた家族と行政との意見交換や、障害者本人のニーズに基づいて様々な啓発活動や交渉を行うようになり、徐々に団体としての目的をもって動き出すようになった。

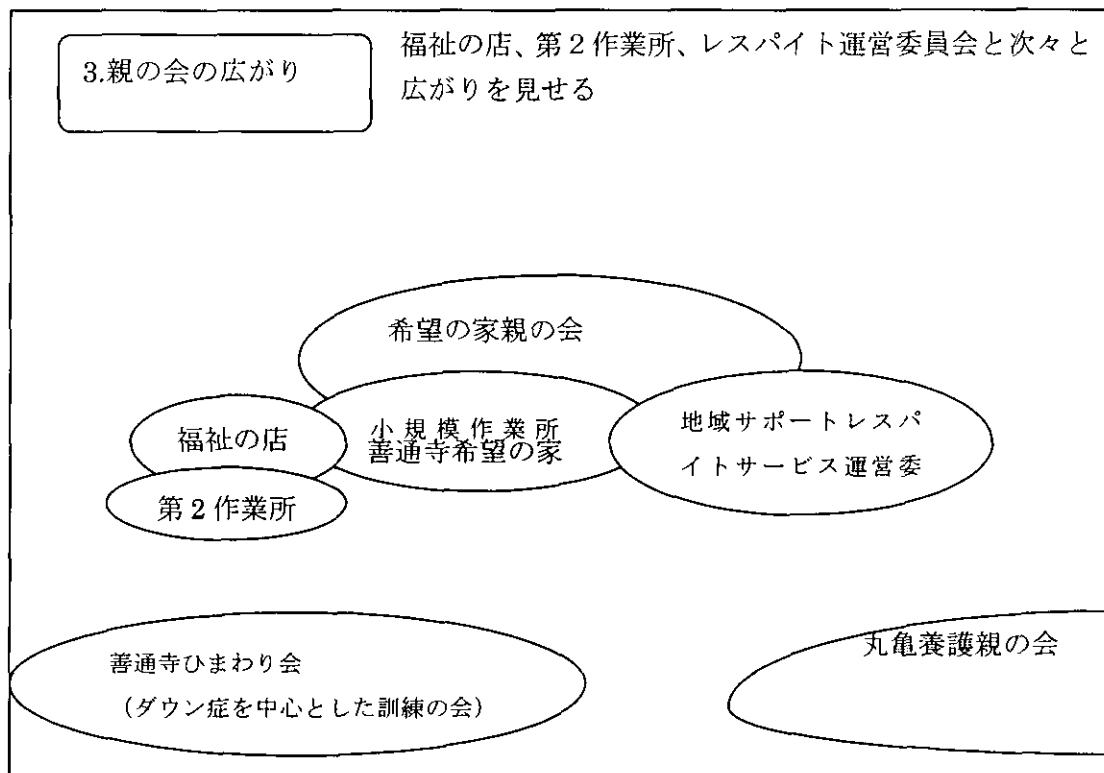
昭和60年に普通寺市総合会館の設立に伴い、「普通寺希望の家」を館内に移転し、小規模作業所として本格的な活動を始めることになった。しかしながら、これは作業所という限定された範囲の動きだったので、養護学校に関係していた障害児者やその家庭は別として、在宅で閉じこもりがちな生活を余儀なくされていた人たちには情報が行き渡らず、「父母の会」の存在さえも知らない状況であったという。

平成4年に、就学前の障害児を抱えた親たちが、「普通寺ひまわり会(ダウン症を中心とした訓練の会)」を発足させた。この頃には、小規模作業所設立後8年が経過し、「父母の会」は「普通寺希望の家」を拠点とする「希望の家親の会」として活動を行っていた。その後、普通寺市社会福祉協議会の主導により、それまで市内を拠点として独自の活動を展開していた3団体(希望の家親の会・丸亀養護親の会・普通寺ひまわり会)の代表による話し合いが行われ、「障害児・者のための検討会」が結成されたのである。「障害・者のため



の検討会」は、おおよそ1ヶ月の期間をかけて「障害をもつ人たちと家族の要望」に関するアンケート調査を実施し、調査結果に基づいて様々な討論がなされた。この調査をふまえて、障害児者施策の一層の充実を求める陳情書を市長に手渡すことができ、市議会に対しては2600余名にも及ぶ署名を添えた請願書を提出することができた。請願書は、議会では趣旨採択されるにとどまったが、この活動は検討会に参加した3団体にとって自らが行政や地域社会に対して積極的に行動を起こす初めての試みとなり、親自身の意識や運動の機運を高める大きな契機となったのである。

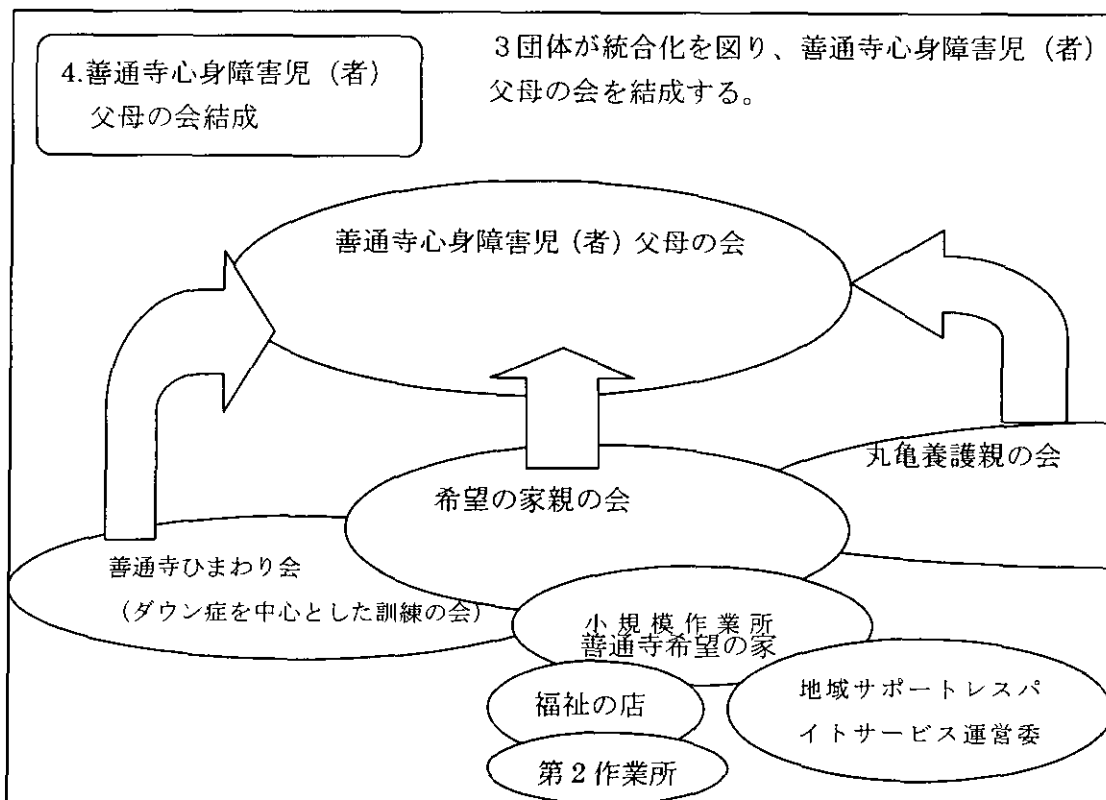
平成5年には、障害をもつ仲間の親から無償で店舗付の民家を借り受けることができたため、「善通寺希望の家」にとって第二の活動の場となる「福祉の店」をオープンし、新しい指導員として矢野芳治氏（現在も後述する授産施設で勤務）を採用した。この頃には利用者が27名となったため、平成6年10月1日に「福祉の店」の住宅部分を活用して第2作業所となる“ふれあいホーム「まお」”を設立することとなった。併せて松本裕佳氏（現在も授産施設で勤務）を指導員として採用し、利用者への支援を担う中心的なスタッフを確保することができた。



一方で、平成6年には、「父母の会」を母体とする「地域生活サポート（レスパイト）サービス運営委員会」が発足し、ふれあいホーム「まお」を拠点とし、作業所の利用者を中心に体験宿泊に取り組み始めた。この体験宿泊が始まった背景には、前年にF. Aさんが健康上の理由により入院した際に、重度心身障害者緊急一時保護制度を用いて医療機関併設の入所施設に息子のF. Bさん（当時28歳）を預けた経験があった。そこでの生活は、日常生活とあまりにかけ離れた生活状態であり、「こういう施設に息子を預けるのは嫌だ」とF. Aさんは思ったが、他に頼める所もなく、仕方なくF. Bさんを預けたのだった。このような体験が、F. Aさんのみならず、父母の会会員にとってレスパイトサービスの必要性を認識する契機となっていったのである。平成7年には1年間の試行期間として交流会・体験宿泊・緊急一時保護などの活動を行い、平成8年にはレスパイトサービスの本格実施体制に入った。公的な補助はなく、運営資金は善通寺市社会福祉協議会からの助成や利用者からの年会費、利用料で賄ったが、コーディネーターや介助者であるサポーターには実費程度を支払うのがやっとで、実質的にはボランティアに近い状態が続いた。

体験宿泊が始まった頃から、四国学院大学の河東田博教授（現：立教大学教授）が専門的立場から側面的支援を行い、また河東田教授の導きにより同大学の学生たちがレスパイトサービスのコーディネーターやサポーターとして活躍するようになった。こうして、専門家と人材を擁した四国学院大学という地域の社会資源が「父母の会」の活動と密接に結びつくようになった。河東田教授は、勉強会や講演などを通して地域生活支援の必要性を「父母の会」を中心とする障害児者の親や関係者に説明し、またレスパイトサービスの実践を通して地域生活支援の重要性が地域に徐々に浸透していくようになった。

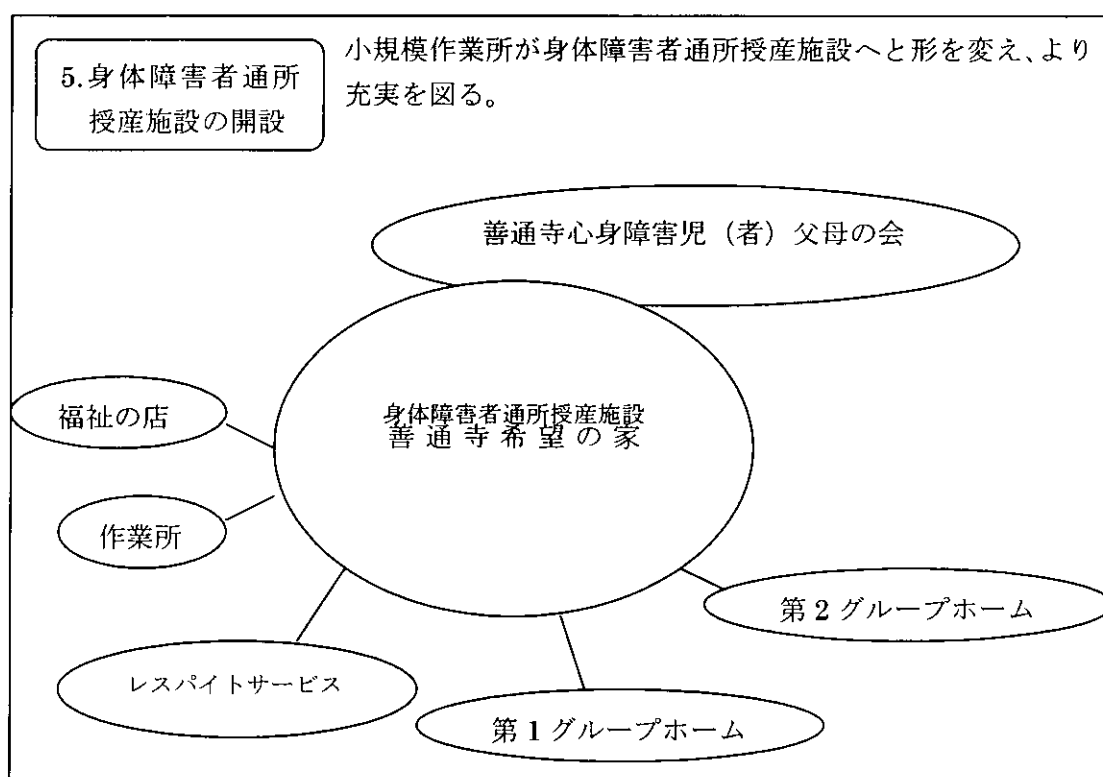
地域生活支援の拠点として小規模作業所を見た場合、様々な取り組みがなされてきたものの、財政的な事情から運営基盤の不安定さが問題視されるようになった。その当時、「善通寺希望の家」とふれあいホーム「まお」で約100万円ずつ、合計で年間200万円の運営上の赤字が続いており、その補填のために利用者の父母たちはバザー等を行っていたのである。そのような状況の中で、平成7年に先述の3団体（希望の家親の会・丸亀養護親の会・善通寺ひまわり会）の代表により団体の統合化に関する協議が行われ、その結果「善通寺市心身障害児（者）父母の会」として新しく再出発することになった（再出発という表現は、実質的に「希望の家親の会」が「善通寺市心身障害児（者）父母の会」の代名詞的な存在になっていたためである）。新生「父母の会」の初代会長にはF.Aさんが就任し、河東田教授や他の四国学院大学の教員も関わって小規模作業所を通所授産施設とするため社会福祉法人化に向けた検討が始まった。



平成8年から始まった募金活動は、平成9年には一般からの募金が1600万円にまで達したが、別に授産施設への通所を希望している13人の父母から3400万円もの寄付を集め、

目標額としていた 5000 万円を法人化の資金として調達することができた。この地域の多くの住民に支えられた募金活動の成果と、「父母の会」やその関係者による努力の結果が実り、現在の身体障害者通所授産施設「善通寺希望の家」は平成 9 年に着工されたのである。土地は善通寺市の協力により無償で貸与され、平成 10 年 4 月 1 日に開設となった（定員 30 名）。初代の施設長には F. A さんが就任し、社会福祉法人「希望の家」の理事には法人化に向けて中心的に活動してきた「父母の会」役員、及び河東田教授や他の四国学院大学教員、企業等役員や地域の篤志家が就任することとなった。また理事長には、吉田医院副院長の吉田翼氏が選出され、小規模作業所であった「善通寺希望の家」は発展的に解消されることとなった。

その後、平成 11 年 4 月には四国学院大学 O B で北海道の知的障害者更生施設に勤務していた田中慎治氏が F. A さんに代わって施設長に就任し、「親の会」が母体となった施設という色合いが強かった施設から、公共の社会福祉施設への転換を図ることとなった。それと同時に、地域生活支援の拠点としてグループホームの設立やレスパイトサービスの運営強化などの事業展開に着手することとなった。

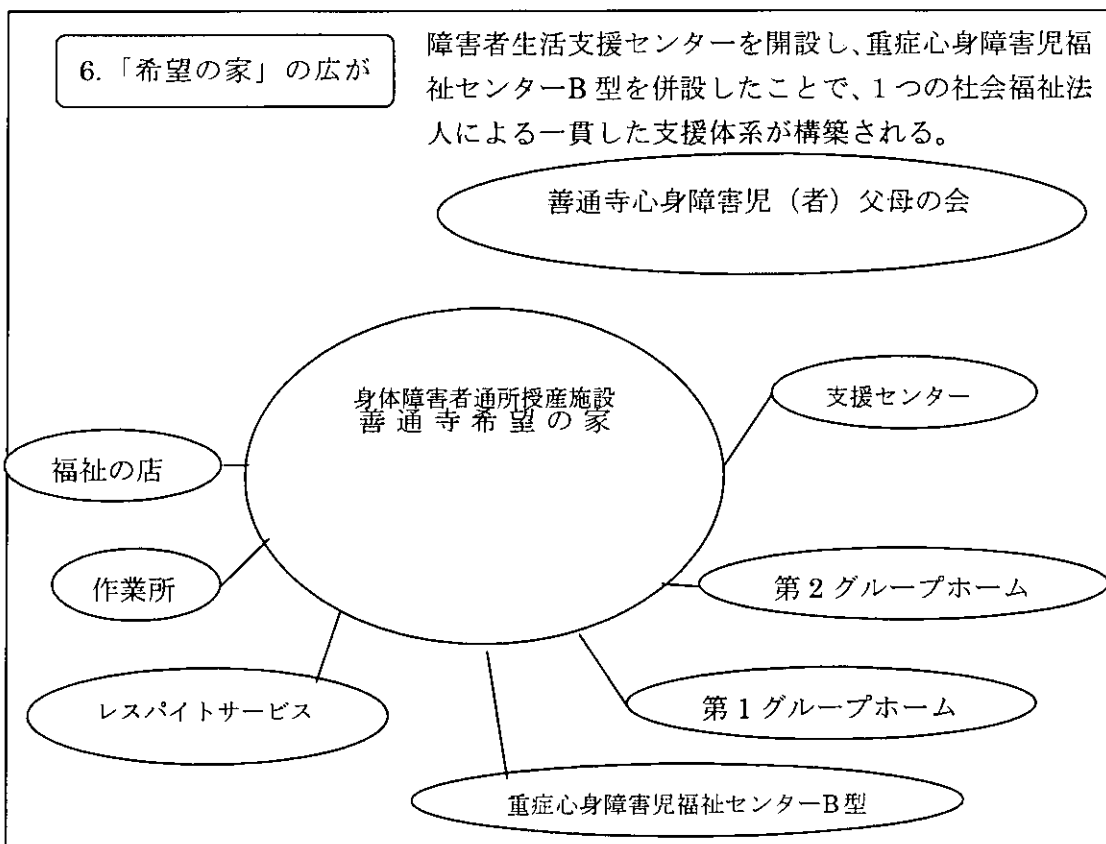


行政交渉の甲斐もあり、平成 12 年 10 月にグループホーム「けやき」（定員 4 名）が設立され、F. B さんも F. A さんと離れて「けやき」での生活を始めた。また平成 13 年に 2 ヶ所目のグループホームとなる「おりいぶ」（定員 4 名）を市内のアパートを借用して開設、これらの実績が積み重なるにつれて、善通寺市や香川県とのパートナーシップも緊密になり、平成 14 年 10 月に善通寺市総合会館内に障害者生活支援センター「ふらっと」が開設され、その運営も同法人に委託されることとなった。そして平成 15 年 10 月には「善

通寺希望の家」に重症心身障害児福祉センターB型が併設された。

一方、「父母の会」が運営してきたレスパイトサービスについては、四国学院大学を中心とする学生たちがサポーター、コーディネーターを担って運営を続けてきたが、それまで年間 30～40 件程度であった依頼が周辺の市町からの利用者が急速に増加したこともあり平成 11 年に 170 件を越え、平成 12 年には年間 300 件以上に達するようになった。これに伴い、学生マンパワーに大きく依存した運営体制に限界が見え始め、拠点施設の整備、財政の安定化、専属コーディネーターの配置といった運営体制の強化が必須の課題となってきた。

そのためレスパイトサービスは、平成 12 年より運営母体を社会福祉法人「希望の家」に移行し、民間の借家を専用のセカンドハウスとして活用することになった。同時に、定期的に開催される運営委員会の他に利用者が結成され、双方の連携の下で公的補助を求めて行政交渉が行われてきた。その結果、平成 13 年度から善通寺市が年額 30 万円の補助を、また翌年度から周辺の自治体の一部が当該自治体の住民に限って利用料補助を開始し、さらに香川県も 3 年間の期限付きであるが「香川型レスパイト育成事業」として年額 108 万円の運営補助を始めた。これに伴い、平成 13 年よりコーディネーターのみ従来の学生ではなく専属スタッフを配置するようになったが、十分な待遇を補償できないために利用者会の同意を得て受益者負担額の値上げも併せて行った（年会費 30000 円、入会金 2000 円、利用料サポーター1名につき1時間 500 円）。また、いわゆる“レスパイト”という言葉が指し示す「家族介護者の休息」という意味での利用だけでなく、障害者本人を含めた地域生活支援のためのケアサービスという位置付けを明確にするように、事業所名称を



「地域生活サポートサービス：ほっと」と改称した。

以上に述べてきたように、香川県善通寺市の地域生活支援の展開は、障害児者の親の活動を中心に、専門的観点から地域の大学教員が、また学生という若い活力、さらには地域住民の惜しみない協力と行政のバックアップが結集して形作られてきたものであると言える。しかしながら、未だ課題は山積している。希望の家の法人化に向けて結束してきた「父母の会」は、法人化後は会員に共通する目標や課題が見えにくくなり、近年は求心力が薄れつつある傾向にある。その一方で、社会福祉法人「希望の家」に対する期待や要請はますます高まり、また期待に応えるべく設立後わずか6年間で身体障害者通所授産施設を拠点にグループホーム2ヶ所、障害者生活支援センター、重症心身障害児福祉センターB型、レスパイトサービスの運営に至る事業展開を行ってきたが、急速な事業の拡大の一方で各サービスの質の見直しが課題となっている。また、法人化の陰で父母の会運営のまま残されてきた第2作業所ふれあいホーム「まお」であるが、上記の「父母の会」自体の求心力の低下に加えて、作業所への公的補助の削減という切実な問題に直面しており、社会福祉法人の傘下に入ることが検討されているものの今後の事業運営について先行き不透明な状態にある。そのような意味で、香川県善通寺市における地域生活支援の取り組みは、一定の成果を見たものの、未だ発展途上の段階にある感は否めない。今後は、障害者本人のエンパワーメントに取り組みつつ、当事者を中心とし、家族、大学、行政、地域住民との連携を強化し、利用者主体のネットワークを再構築していくことが不可欠であろう。

最後に「ここまでやってきたのはなぜですか？」とF. Aさんに聞いてみた。

F. Aさん「(障害をもった)親の一念である。障害が重ければ重いほどそれをエネルギーとしてきたのです」しかし同時にF. Aさんはこうも付け加えられた。「これからは親が前面に出るのではなく、本人を中心に据えた地域生活支援を考えていかななくてはなりません」



## 6. 論点と考察

善通寺市の地域生活支援ネットワークに関して二事例を通して考察してきた。ここでは、全体的な論点と総合的な考察を整理し、今後の展開や期待に関しても記しておきたい。善通寺市は、四国においては数少ない福祉系四年制大学である四国学院大学があり、街の中心部には自衛隊の駐屯所がある。福祉関係の地域生活支援ネットワークという観点から地域社会を見ると、大学の学生ボランティアといわれる人たちが、この地域の障害者福祉を支えてきたと言っても過言ではない。障害をもつ子どもを抱えた親たちは、公的なサービスが全く期待できないという状況の中で、新しい組織を生み出してきたのである。

### 6-1 親を始めとする関係者の意識に関する問題

地域社会で生活することの重要性が叫ばれ、「ノーマライゼーション」という思想が世界的に広まっており、全国的にコロニー解体や施設の閉鎖・縮小が本格化してきている昨今においても、ある「親の会」の四国ブロック大会において、「親亡き後への施設整備」という命題が掲げられたのは、未だ記憶に新しい一昨年の出来事であった。善通寺市を始めとする四国四県の特徴を見れば、重度障害をもつ子どもは、幼い時から肢体不自由児施設や重症心身障害児施設へ入所し、施設から養護学校へ通う生活が通常であり、学齢期を越えると入所型の更正施設や授産施設へ移動し、施設から施設への人生を過ごすのである。そして、最後には、身体障害者は「療護施設」へ、知的障害者は「入所更正施設」へ入れてもらうことができ、人生の終焉を迎えることになるのである。この理想的なパターンから脱落していくものは、親に家へ戻り、地域にある小規模共同作業所へ通うことになる。両親が居る家庭に戻れるということは、喜ばしいことだと思わなければならないのだが、両親の老化や死後のことを考えると、安住の地である施設から離れないことが、家族や親戚の『安心』につながっていたのである。

このような考え方や生活パターンは、かつての日本において全国的に見られた事柄であったが、北欧からの「ノーマライゼーション思想」や米国からの「自立生活概念」から影響を受けた障害をもつ人たちが自身や先進的な親の団体は、施設から地域社会への意識変革に取り組んできたのである。しかしながら、そのような情報が伝わりにくい地域、新しい情報に対して憎悪や拒絶という方法しか取れない地域は、現在でも施設中心の生活支援を実施しているところも少なくないのである。

また、地域社会における思想的な変化を導く大きな要素としては、障害をもつ人たちの当事者活動があげられる。しかしながら、この周辺地域は、歴史的にも障害者運動が弱く、意識変化の起爆剤さえも見つからないという感覚がある。多くの人材を保有していると思われる四国学院大学においては、障害者に対する別枠入学制度があり、多くの障害をもつ学生が在籍している。彼等が地域の意識改革に関する起爆剤となる可能性は大きいと思えるのだが、4年間の生活では「差別や偏見」を受けることが少なく、大学からの支援プログラムや友人・知人に援助されながら、起爆剤となるエネルギーを貯めることなく、未発達のままで卒業していくのである。よって、他人の幸福を考え、地域を変えていこうとする人材が登場しにくい環境にある。この研究で取り上げたF. Tさんは、この地域で唯一の地域自立を成し遂げた人ではあるが、当事者運動を牽引するまでの経験やエネルギーを持ち合わせてはいないのである。

この地域に存在する施設優先志向を変革していかない限り、地域の生活支援ネットワークは発展していかないのではないだろうか。

#### 6-2 地域生活支援ネットワークに関する問題

この地域の生活支援ネットワークに関する問題点は、大きく分けると以下の三つになると思われる。まず一つは、地方都市に顕著に見られる傾向ではあるが、大規模法人が地域福祉サービスの大半を独占してしまっており、他の事業所や企業までにも関わる機会を与えないという状態である。この地域の歴史的展開を見ていただくとよく分かるが、親の会が組織した小規模共同作業所であった「希望の家」が、社会福祉法人を取得したことを契機に、多くの事業に手を伸ばしてきている。通所授産施設に通っているメンバーや地域の障害をもつ人たちと家族が求めている結果であり、方向性は間違っている訳ではなく、現在の有り様も地域生活支援の発展途上と理解するならば、問題として取り上げる点はないのかも知れない。しかしながら、支援ネットワークという観点で考えると、同一法人の事業所ネットワークという限定された枠の中で、サービスが動いているような感覚がある。

二番目の問題は、他に存在する大半のサービス事業所が、利用者のニーズに答えられていないという現状から出てきている。障害をもつ人たちに対応するサービスを提供している事業所は、数的に限られている上に、朝8時から夕方6時までというような限定があったり、日常生活支援という項目では受けないという制約があったりして、在宅では思うような生活が為されないような地域なのである。要するに、活気ある事業所が少ないという理由から、ネットワークが形成しにくくなっているのである。

そして三番目は、善通寺市の支給量決定が少ないことがあげられる。活発な事業所を生み出していこうとするのなら、障害をもつ人たちへの支給量を増やし、事業所への経済的効果を促進しなければならないのではないだろうか。障害をもつ人たちの日常生活を豊かなものにしていくには、豊富なサービスを必要とするし、それに応えようとする事業所も数多く参入してくるようになるのである。障害をもつ人たちに対する支援費支給量を増加させることにより、全てが好循環するということに気付かなければならないのである。

これからの地域生活支援ネットワークを考えていく時には、「希望の家」という法人が保有する機能をNPO法人等へ分割譲渡していく必要があるのではないだろうか。一法人が全ての機能を独占するのではなく、様々な形態にあるサービス事業所が担当することになれば、真の意味で「選べる制度」が実現していくように思えてならない。

#### 6-3 障害者ケアマネジメントの体制整備に関する問題点

この地域では、障害者ケアマネジメントが未だ機能していないと言っても過言ではない。前述した法人が「市町村障害者生活支援事業」の委託を受け、自立生活支援センターを福祉センターの中に設置している。機能としては、福祉圏域が他の市町村にも跨っているので、巡回相談や家庭訪問などが中心となっている。障害者ケアマネジメントの体制整備という観点では、相談支援事業が動き出して約1年半になるが、地域の「サービス調整会議」や「障害者ケアマネジメント推進協議会」が設置されてはいないし、その必要性を訴える声も上がってきていないと思われる。圏域を構成する市町村も、このような障害者ケアマネジメント体制を確立していかなければならないという意識が弱いように感じられる。

個々のケースに関しては、関係者が「ケース会議」を持つようにはなっているが、「サービス調整会議」という名称には遠いと言えない。やはり、障害者ケアマネジメントの体制を整備していくには、社会資源を増加させ、活発に連携させていくネットワークを形成させることが重要である。障害者ケアマネジメントの基本である「社会資源の開発」は、新しい資源を作り出していくことも大切ではあるが、名前だけの制度であるとか、眠ってしまっている制度や機関を揺り起こすことも手掛けなければならないのである。

#### 6-4 二事例を通して見た居宅生活支援サービスに関する問題

40年間という歳月を社会とは隔絶された環境に居たF. Tさんは、通所授産施設に通い始めたことによって、社会と接する楽しさや友人を始めとする他者との関わりの嬉しさを実感するようになった。母親の死去に伴い、家庭での生活が困難になり、緊急的に同法人が経営する知的障害をもつ人たちを対象にしたグループホームに、自費を支払って生活をつないでいたのである。その後、グループホームでの生活に大きな制約を感じ、一人暮らしをすることになった。支援費制度が施行される以前は、学生ボランティアや友人・知人を24時間体制で組み入れていたが、少数の介護担当者に無理を強いていたことは事実である。

支援費制度が施行され、F. Tさんの介護態勢も以前よりは多少なり楽にはなったが、数的に限られた自薦式ヘルパーをNPO法人の事業所に登録し、一種のセルフ・ケアマネジメントを実行しているの、常に新しいヘルパーを模索していかなければならないし、学生が中心という理由で長期休暇期間の対応が困難さを極めている。サービス事業所が少なく(同市に日常生活支援の事業所は皆無)、支給量も限られている地方都市の現状として、日常生活に全面介助を必要とする重度障害をもつ人たちが地域自立を営むには、相当の苦勞があると確認できる。日常生活支援というサービスで入っているヘルパーは、上の表からも分かるように、支援費支給量から超過する部分をボランティアとして対応することにより、F. Tさんの生活を支えていると言える。さらに、日曜日に教会へ行っているのも、確かに宗教的な思いも含まれているが、休日の日中介護をお任せできる点も大きいことは明らかである。

実家に居た時には想像も出来なかった「焼鳥屋」に行くことや、学園祭に出掛けていくことが、F. Tさんには人生の楽しみとなっているのである。この事例を通して感じたことは、障害のない人たちであれば、普通に求めて楽しめることが、重度障害をもつ人たちには介護時間が足りないということで、ニーズが満たされないのは不公平さを感じてしまうのである。地域社会において、重度障害をもつ人たちが「エンパワメント」していくためには、生活介護以外の『ゆとりある時間』が充実しているか否かによって、エネルギーの蓄積量が異なるのではないかという仮説を立てたい。

また、F. Yさんの事例から、知的障害をもつ人たちにとって、グループホームというものが、生活介護という観点から、どのように機能しているのかを明らかにできている。通所授産施設に通っているウィークデイは、グループホームと施設の往復のみで終始しているが、彼女にとっては、世話人と会話をしたり、夕食の準備等を手伝ったりすることが大きな喜びとなっているのである。さらに、自分よりも障害が重い人たちに対する御世話、自分の役割であると自覚しており、体験利用者に対する面倒見の良さや他の

生活者に対する心配りは、周りのスタッフも高く評価している。

グループホームでの生活が楽しくて、週末なども世話人との会話や関わりを楽しみながら、ホームから外出しない生活が続く可能性も少なくない。この一週間を見ても、グループホームと授産施設というサービスを除けば、「移動介護」を1時間だけ利用しているが、これもグループホームの周辺を散歩しているに過ぎないので、レクリエーションの拡大等の課題をも含んでいると思われる。

この地域に知的障害をもつ人たちを対象とした移動介護を担当してくれる専門的事業所が存在するようになれば、彼等の生活にも広さと奥行きが出てくるだろうと期待している。

#### 参考文献

社会福祉法人 希望の家、「えがお」 開所記念誌、普通寺希望の家、1998

普通寺市、普通寺市障害者福祉基本計画、1997

普通寺市、第2次普通寺市障害者福祉基本計画、普通寺市健康福祉部社会福祉課、2003

普通寺市 HP、普通寺市大発掘計画 (<http://www.city.zentsuji.kagawa.jp/2004.2.20>)